

<学校名> 朝霞市立朝霞第六小学校
<所在地> 朝霞市本町1丁目25番地1号
<電話> 048-461-0410
<本事例の特徴>

本校学区には30年以上朝霞市とマレーシア国際交流活動を行ってきた「認定・埼玉県指定特定非営利活動法人メイあさかセンター」がある。この地域人材と協働し、マレーシアの児童とオンラインで授業をつなぐ取り組みを行った。グローバル化した社会において、日本国内だけでなく地球規模の視野に立って、主体的に行動することのできる児童の育成を目指し、単に外国語を用いるだけでなく、道徳・総合的な学習の時間・外国語等教科横断的な学習形態を通して、国際理解への一歩とするねらいをもって取り組んだ。マレーシアは公用語として英語を用いており、本物の英語に触れ活用する実践の取り組みについて紹介する。

<具体的な取組や成果>

①特別の教科 道徳（資料提供：メイあさかセンター）

- 1 主題名 他国の人々を理解して
内容項目 [C 国際理解、国際貢献]
- 2 ねらい 日本人としての自覚や誇り、我が国の伝統と文化を理解し、尊重する態度を深めつつ、自分にできることを考えるなどして、進んで他国の人々とつながり、交流活動を進めたりより親しくしたりしようとする国際親善の態度を養う。



教材名 「絵を通じての友好 マレーシアと日本一心をつなぎ・夢をつなぎ」

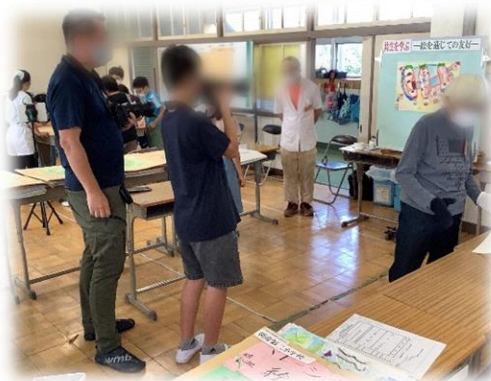
（出典：認定・埼玉県指定特定非営利活動法人メイあさかセンター資料）

○成果

本校児童は、図画工作の時間に作成した作品の一部を、毎年マレーシア児童と届けあっている。その活動を支えているのが、地域で30年以上国際交流活動を行っているメイあさかセンターである。児童たちは、毎年絵の交流活動をしていることは知っているものの、その背景にどのような思いをもった方々の活動があるかは知らずにいた。本学習を通して、国際理解について新しい気づきがあったと振り返りに記入する児童が多かった。

②総合的な学習の時間（協力：メイあさかセンター）

- 1 単元名 自分を見つめて
- 2 ねらい メイあさかセンターの活動を通して、地域の特徴やよさに気付き、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気付く。また、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育てる。



○成果

実際に絵の梱包作業等を体験したり、手渡す相手に対する配慮や活動する人の思いに触れたりすることで、国際理解・国際親善のためにどんな意識で取り組むことが大切か気づきを得る児童が多くみられた。

③マレーシア大使館広報官による講話

マレーシアが多民族国家であるということや、日本とは異なる文化と宗教について広報官から直接お話をいただいた。質疑応答を通して、オンライン授業への期待を高め、見通しをもたせた。



④外国語～オンラインによる交流授業～

事前に外国語の授業で、夢に関する表現や、尋ね方・考え方について学習した。

活動内容	児童の活動
1 挨拶 2 クイズゲーム	・簡単に互いの小学校の紹介をする（代表児童より） ・各クラスの代表児童による「将来の夢クイズ」を行う。
<p>Q : What is my dream? Hint 1 They need to wear white cloth. Hint 2 They need to study very hard. Hint 3 They can save many people. Can you guess? A : Your dream is doctor! Q : That's right. I wanna be a doctor because Doctor can help a person. I want to become the doctor who can help everybody.</p>	
3 質疑応答 (20分)	・通訳を仲介とし、子供たち同士の交流を図る。
<p>日本の児童の質問(マレーシア児童も同様に質問をする)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業式はいつですか。日本は3月です。 ・中学校ではどんなことをしますか。日本では部活動があります。 ・将来についてどんなふうに考えていますか?どんな人になりたいですか。 ・どんなことを大切にしていますか。 	
4 振り返り・挨拶	・今回の交流についての感想を発表する。(代表1名ずつ)

○成果

互いの国の写真をみせたり、将来の夢について詳細を伝えたりすることで、互いの文化の違いに気づき興味を抱かせることができたことは、国際理解への一歩となった。世界の同年代の児童と実際に交流したことで刺激を受けたり、新たな気づきを得たりした児童が多くみられた。同じ学校のクラスメイトに伝える活動に比べ、他国に住み異なる環境で学ぶ相手に伝える活動を行ったことで、より「伝えたい」「知りたい」という気持ちを引き出すことができた。

【児童の声】

- ・初めて同い年の外国の子を目の前にして、なんだか衝撃だった。
- ・日本と全く違う考え方をしているのだと思った。特に、家族のことをそんなにも人生の中心にしていることに驚いた。全く予想しない回答だった。
- ・この子たちと将来一緒に仕事をしたり、関わったりするのもかもしれないと思うと、このままではだめだなと思った。
- ・なんて言っているかはほとんどわからなかったけれど、わかる言葉や単語もあって、いま勉強していることをもっと頑張っていけば、もっと分かり合えるのだと思った。



マレーシア児童の英語力の高さと、通信機器のノイズ等で、勉強してきた外国語を生かしきれず、全員が主体的に参加するには難しい部分もあったことが、今後の課題ではあるが、目指していた国際理解の基盤となる実践ができたと感じる。直接交流したことで、これまで意識しなかったことや、互いの国の違い、将来について考えることができたことは成果であった。

◇交流して気づいたこと、学んだこと、今後にかけることなど

マレーシアは日本より進んでいると思った。日本では小学生は10分ほどしか勉強してないのに、1日3時間も勉強しているのはすごいと思った。これから大人になって、マレーシアの生徒たちと一緒に働けるかもしれない、いいかなとも思っている。私も世界の同い年の子どもに負けるようにがんばりたいと思った。また、1日3時間の勉強をいやがる子どもは少ないのはすごいと思った。それから、家族に対する態度が素晴らしいと思った。家族が大切にされていると感じた。